



第77号 2017年10月発行
 発行者 沖縄県立総合教育センター
 所長 宮里 幸利
 〒904-2174 沖縄県沖縄市与儀3丁目11番1号
 電話 098-933-7555 FAX. 098-933-3233
 URL <http://www.edu-c.open.ed.jp/>

巻頭言 学び続ける

沖縄県立総合教育センター
 所長 宮里 幸利

▼今年は日本の大転換であった大政奉還から150年の節目であります。刀からAI時代への大きな変革であります。AI（人工知能）の実用化が多方面に広がり、産業や経済などあらゆる分野で大きく変わろうとしています。先の見えにくい混沌とした時代の中で、教育の重要性がより鮮明になっています。去る3月に幼・小・中学校の新学習指導要領が公示されました。すべての教科で「①生きて働く知識・技能 ②未知の状況にも対応できる思考力・判断力・表現力等 ③学びに向かう力・人間性等」の3つの柱に基づいて、育成すべき資質・能力を明確にして、その為に必要な指導方法の工夫・改善を求めています。情報やAI、グローバル社会の中で活躍し「生きる力」を育む為には、時代に合わせた教育の質的転換と教職員にはこれまで以上に学び続けることが肝要であります。▼中教審答申にも「学び続ける教員像」が示されています。「教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・技能の絶えざる刷新が必要であることから、教員が探究力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である」。児童・生徒の模範として教職員には常に知識・技能の刷新が求められています。学びは教えにつながる重要な側面であり表裏一体の関係でもあります。▼静寂な学校とは対照的に、総合教育センターの夏は人・物・施設がフル回転であります。教科の専門性をより高める研修、職務遂行に必要な知識・技能を向上させる研修、職務の指導力向上を目指した研修等、多くの実践的な研修が実施されました。センターが提供する74の夏期短期研修講座、離島で実施される移動教育センター講座、初任研や10年研などの指定研修に延べ6,000名余が参加しました。文部科学省の調査官や大学教授等、専門性や経験のある講師陣による深みのある研修はもとより、積極的に学ぶ教職員の姿勢に明るい本県教育の姿を強く感じました。▼9月と3月にはセンター長期研修員（6ヶ月、1年）の研修成果報告会があります。日ごろの授業や学校課題に真摯に向き合い、課題解決の方向性や糸口を授業実践、教育理論、教材教具の作成、ICT活用等を通して検証した研究成果の報告会であります。そこにも学び続けている教諭の姿があります。使命感と情熱、学び続ける教師集団の先に、本県の教育課題である学力向上は、着実にしっかりと花を咲かせ実を結ぶと思います。▼センターには実践的な調査研究と質の高い研修の実施が求められています。研究・指導のオーソリティーを自覚し「発信し出かけるセンター」「学校に寄り添うセンター」「学校の学校としてのセンター」として学校支援の充実を図っていきます。

***** もくじ *****

●巻頭言 「学び続ける」	所長 宮里 幸利	—1—
●平成30年度長期研修員募集のお知らせ		
●平成29年度第2回教育講演会『主体的・対話的で深い学び』の視点を踏まえた授業展開	-教科研修班-	—2—
●どうなるの！道徳科の記述の評価？		
●特別講演会「沖縄の子どもの貧困と学校現場の役割」	-教育経営研修班-	—3—
●共感的な人間関係の育成を図るスポーツ交流会		
●自主講座 小学校・中学校の先生方をサポート！ ●新学習指導要領要点	-理科研修班-	—4—
●親子星空教室と夏休みおもしろ科学教室		
●ワンランク上をめざす!!「特別支援教育スキルアップ講座」の開催	-特別支援教育班-	—5—
●特別支援学校 新学習指導要領が公示		
●特別支援学校版校務支援システム来年度導入！ ●小学校プログラミング教育導入に向けて	-IT教育班-	—6—
●平成29年度中学生向けキャリア教育実践講座 -ものづくり体験隊員！-	-産業教育班-	—7—
●前期・離島長期研修研究報告会 ●研修を終えて		—8—

平成30年度長期研修員募集のお知らせ

研修目的

※詳細については、各学校に送付されている募集要項にてご確認ください。

- 本県の教育課題の解決・改善及び教科・領域での指導方法の工夫・改善を図るための理論研究
- 各講座等を通して教職員としての資質向上を図り、学校現場における課題解決に対応できる人材の育成

平成 29 年度第 2 回教育講演会

『主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）』の視点を踏まえた授業展開

去る 7 月 31 日（月）、第 2 回教育講演会が本総合教育センター多目的研修棟で開催されました。今回は琉球大学教育学部教授大城賢氏を招聘し、ご講演を頂きました。

導入では、現在の人工知能アプリの一例を取り上げ、また近未来において現在存在しない職種に子供たちが就くなど、社会の加速度的な変化を実感させる話を交えながら、その対応に必要な児童生徒の資質・能力の育成、授業改善、教師の意識変化などの必要性が述べられました。

資質・能力育成の面では、今回の学習指導要領改訂を家に例え「従来の模様替えから、今回は元々ある家に増築した。母屋のレイアウトも変えないといけない。教師一丸となって取り組む必要がある」と述べ、これまでの受身的な授業の反省や今後の英語教育の大きな変化（小学校英語の教科化等）を踏まえて、「自らが学ばない限り学ばない」と、主体的な学習がさらに求められる点に触れられていました。

授業改善の点からは、現行学習指導要領は「目標」と「内容」中心だが、今回の改定から「主体的・対話的で深い学び」を入れることで指導法まで踏み込んだ内容となり、より教師の指導法の工夫改善の重要性が強調されました。教員の意識変化についても、ベネッセの調査から中学や高校の教諭が、「自分が教えている生徒が英語を使っているイメージが湧かない」と答えた率がそれぞれ 25.4%、37.3%あり、「何のために英語を教えるのか」、教師の意識改革の必要性が語られました。

一方、アクティブ・ラーニングでの問題点も指摘しつつ、生徒アンケートからペアやグループ学習についていけない生徒の分析も丁寧に行われ、一部児童生徒が取り残されないような授業展開についても述べられていました。

実践事例では、広島大学付属小学校での「修学旅行先」をテーマとした生徒と教師の対話による“recast”の手法にも触れながら話が展開されました。参加された先生方からの感想は本所 Web ページにも掲載されているので、是非ご覧いただけたら幸いです。

どうなるの！道徳科の記述の評価？

先生方の不安にお答えします！

平成 30 年度から完全実施（小学校）となる「特別の教科 道徳」について講座で寄せられた「記述の評価」に関する質問から最も多かったベスト 3 を Q&A 形式にまとめてみました。

Q1: 評価することで先生方の望む意見を言う子供や思ってもいないことを言う子供が多くなるのではないのでしょうか？

A: 道徳の授業は教師の望む発言や道徳性の高い良い意見を言わせたり、書かせたりしてそれを評価するものではありません。あくまで道徳科の目標に照らし合わせて子供がどのように学んだか、学びの様子（具体的な取り組み状況）を記述で表現します。こういった誤解が起こらぬように子供たちにも道徳のオリエンテーション等で道徳の授業で大切にしたい学びの姿勢をきちんと伝える必要があります。

Q2: 受検の可否に影響はないでしょうか？

A: 調査書に記載せず、入学者選抜の可否判定に活用することはありません。昨年 7 月に文科省より各都道府県教育委員会を通して通知もされています。

Q3: 普段の行動で問題傾向の目立つ子供で授業とギャップのある子はどのように記述するのでしょうか？

A: 生き方や実際の行為に繋がる道徳的な深い学びには達していないが道徳の授業において、道徳科の目標に記されている学びの姿勢（自己をみつめ、多面的・多角的に考えたり他者の意見に耳を傾け思考を深めている様子等）が見られればそこをきちんと評価し、子供の励ましの評価につなげて下さい。

ポイント

【教科の評価との違い】

教科の評価

授業の目標（ねらい）⇔ 評価規準

道徳科の評価

目標に向かってどのように学んだか
子供たちの学びの姿を肯定的に記述

特別講演会「沖縄の子どもの貧困と学校現場の役割」

平成 29 年 6 月 13 日、本総合教育センター本館講義室において、「平成 29 年度県立総合教育センター長期研修必修講座第 1 回特別講演会」が行われました。



本講演会は「明日を担う児童・生徒の教育に携わる教育関係者が、豊富な経験及び実践に基づいた講話を拝聴することで、今後の教育方策等に資する機会とする。」を目的としており、今年度第 1 回は、沖縄子どもの貧困解消ネットワーク共同代表、山内優子先生を講師にお迎えしました。「沖縄の子どもの貧困と学校現場の役割」という演題で、豊富な写真や詳細なデータを提示しながら、終戦直後から現在に至るまでの沖縄と貧困の関係、児童福祉の理念、沖縄の子供たちの生活環境、子供の貧困と非行との関連性、国や県の施策と問題解決への取組等についてお話をいただきました。

山内先生の沖縄の子供たちを支えたいという熱い思いが伝わってくる、中身の濃い充実した講演会となりました。

研修員の振り返りシートのアンケートではいずれも満足度の高い回答が寄せられました。以下にいくつかの感想をあげます。

「便利で豊かな世の中になり、貧困という言葉が見えなくなっている現実の中で、苦しんでいる子たちがたくさんいるということが知れて本当によかったと思いました。子どもが将来幸せになるために！山内先生の言葉がとても心に響きました。」

「非行の根っこには貧困があり、これを改善しないと何も解決できないということを改めて認識しました。貧困を抜け出すには勉強が大切だと思います。学校が子どもの居場所となるよう、一人一人と丁寧に向き合っていきたいと思いました。」

「講話を聴きながら、過去の教え子の顔が数名出てきました。今何をしているのだろうと、とても不安になりました。また、現在目の前にも気になる子達があります。その子達に私がすべきこと、関係機関につないで「居場所」をしつかりつくってあげたいと思いました。」

共感的な人間関係の育成を図るスポーツ交流会

平成 29 年 6 月 30 日、沖縄県総合運動公園メインアリーナにおいて、「平成 29 年度第 1 回適応指導教室通級児童生徒等スポーツ交流会」が行われ、11 団体（適応指導教室 9、小学校校 1、中学校 1）、42 名の児童生徒が参加しました。

本事業は、本総合教育センター主催の事業で県内の適応指導教室に通級する児童生徒や教育委員会、学校の教育相談室等に通級する児童生徒が「親睦を深める」「共感的な人間関係の育成」「自己の可能性の開発を援助する」等を目的として実施し、実際の活動としては、全体交流、スポーツ交流、開会式、閉会式を行いました。スポーツ交流ではバドミントン、卓球、ソフトバレーボール、ドッジビーの種目を設定し、児童生徒は、各自好きな種目に自分のペースで参加し、汗を流していました。全体会では、全児童生徒がエンカウンター（進化じゃんけん）に参加し、和気あいあい、楽しく交流をすることができました。

また、閉会式では、代表児童生徒が、緊張しながらも堂々と自分の思いや感想を述べることができました。



実施後のアンケートから『参加してどうだった？』の質問に対し、ほとんどの子が「とても楽しかった。」「楽しかった。」と答えており、また、感想からも「卓球ができて楽しかった。」「みんなで交流ができて良かった。」「いろいろな教室とバドミントンの試合ができてうれしかった。」「最初は楽しくないんじゃないかと思ったけれど、勇気を出して行ってみたら楽しくてまた参加したいと思いました。」等、達成感を得、自己有用感を高める機会となり、学校復帰に向け意欲を高めることができました。

自主講座 小学校・中学校の先生方をサポート！
「小学校理科講座」「小・中家庭科講座」

小学校理科を担当する先生方を対象とした自主講座は、今年度で8年目となります。勤務後にも関わらず多くの参加者があり、これまでに理科は化学分野、生物分野、地学分野と計4回の講座を実施しました。今年度も、「問題解決」8つのステップを軸に、理科の実験方法の指導や解説、教材作製など情報交換を行っています。



写真 第2回中学理科
(植物の発芽と成長)



写真 第2回中家庭科 (防災食)

家庭科も2回実施しミシンを使っの作品製作や調理実習の指導方法について協議・実践を深めました。

9月以降について物理分野、地学分野、化学分野、中学校は技術分野の4回の講座を予定しています。

※講座案内は、本センターHPIに掲載しています。ご覧ください

<http://www.edu-c.open.ed.jp/>

新 学 習 指 導 要 領 要 点

【小学校理科】

学習指導要領理科の「見方や考え方」は「見方・考え方」となり、『資質・能力を育成する過程で働く、物事を捉える視点や考え方』と定義されました。また、子供が科学的に探究する学習には、「見通し」、「振り返り」を重視した学習活動を工夫することとし、自然災害に関する内容等が充実しました。

【小学校家庭科】

小学校学習指導要領では4つの内容から3つの内容に変更、衣生活内容が「衣食住の生活」内容に変更となり更にA家族・家庭生活では「家族・家庭生活についての課題と実践」が新設されました。

【中学校技術分野】

学習指導要領の改訂で、小学校における学習との接続を重視する観点から、生物育成の技術に関する内容とエネルギー変換の技術に関する内容の順序が入れ替わっています。

親子星空教室と夏休みおもしろ科学教室

「親子星空教室①」(7/1:親子41名参加)と「夏休みおもしろ科学教室」

(7/22:親子約120名参加)を開催しました。親子星空教室では、天候にも恵まれ月のクレーターや金星、土星の環まで観察でき天体への関心を高めました。

各分野での体験内容

夏休みおもしろ科学教室では小学校4年生以上を対象に、下記のA～Eの5分野から2分野を選択し、60分ずつ保護者と共に体験してもらいました。子供たちは観察・実験・体験を通して学習する喜びを実感できたと思います。



写真 親子星空教室の様子



A: 物理 (サイエンスマジック)



B: 化学 (低温の世界)



C: 生物 (草花のしおりづくり)



D: 地学 (3Dメガネで岩石観察)



E: 技術 (プログラムで動かそう)

ワンランク上をめざす!! 「特別支援教育スキルアップ講座」の開催

「特殊教育」から「特別支援教育」へと転換し10年になりました。改めて「特別支援教育」が目指したものは何だったのか、国際的な流れやそれに伴う国内の法整備等がどのように進められてきたのか、就学支援の変化やインクルーシブ教育システムの推進に伴って学校現場にどのような変化が求められているのか、琉球大学教職員大学院の城間園子准教授を講師に招いて特別支援教育の理解を深め、そして、新学習指導要領が示す連続性のある「多様な学びの場」の実現を目指す専門自主講座を開催しています。

●開催日時及び内容

回	期 日	研修内容（予定）
1	7/ 8（土）	教育的ニーズ、特別支援教育及びインクルーシブ教育に関する基本的事項の確認
2	9/30（土）	5障害、発達障害の「障害の特性理解」と子供のアセスメント
3	11/25（土）	障害のある子供に配慮した特別支援学級、通常学級の授業づくりと学級づくり
4	1/27（土）	障害のある子供を持つ保護者への対応と教育相談、関係機関と連携した支援体制づくり

※いずれの日も9:30～12:00の時刻で実施しています。

◎講師：琉球大学 教育学研究科 高度教職実践専攻 准教授 城間 園子

●場所：沖縄県立総合教育センター 特別支援教育棟 第1プレイルーム

●対象（定員50名）：教育事務所・市町村教育委員会指導主事、特別支援学校教諭

●問い合わせ・申し込み（個人での申し込みとなります。下記まで問い合わせください。）

沖縄県立総合教育センター 特別支援教育班 TEL098-933-7526 Fax098-933-7528



第1回目（7/8）の講座の様子
子供の教育的ニーズをどう捉えて「合理的配慮」をどのように提供するか、ワークを交えた実践的な研修となりました。

特別支援学校 新学習指導要領が公示

平成29年4月新特別支援学校幼稚部教育要領、特別支援学校小学部・中学部学習指導要領が公示され7月18日（火）～19日（水）に東京において説明会が行われました。

これからの社会は、国と国との隔たりのないグローバル化の進展や絶え間ない技術革新、人工知能（AI）の飛躍的な進化など社会構造や雇用環境の急速な変化による予測が困難な時代となっています。また、平成26年には「障害者の権利に関する条約」に批准し、「障害のある者がその能力を最大限に発達させ、社会に効果的に参加することを可能にするため、障害のある者と障害のない者とが共に学ぶ仕組みとしての『インクルーシブ教育システム』の構築が求められています。

中央教育審議会答申においては、①「何ができるようになるのか」、②「何を学ぶか」、③「どのように学ぶか」、④「子供一人一人の発達をどのように支援するか」、⑤「何が身についたか」、⑥「実施するために何が必要か」に加えて、特別支援教育に関しては、①インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進、②子供の障害の重度・重複化・多様化、③社会の急速な変化と卒業を見据えた教育課程の在り方が求められています。

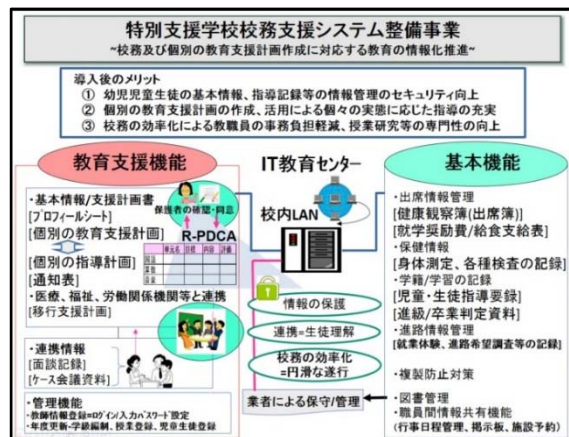
今後、特別支援教育における障害のある子供一人一人の教育的ニーズに対応した適切な指導や必要な支援を通して、自立と社会参加に向けた資質・能力を身につけていく観点から教育課程の編成に関して教育センター特別支援教育班として、学校現場に助言等の支援を行っていきたいと考えています。

特別支援学校版校務支援システム 来年度導入！

沖縄県教育委員会は「平成 29 年度特別支援学校校務支援システム整備事業」を実施し、特別支援学校版校務支援システム構築と整備にかかる業務を行っています。その目的には、幼児児童生徒個々の障がいの状態等に応じた教育の充実、個人情報セキュリティ対策、校務の効率化と事務負担の軽減、教職員間及び関係機関との連携推進、地域の特別支援教育のセンター的機能の向上が挙げられます。またそこには特別支援学校が抱える課題を克服し、幼児児童生徒と向き合う時間と教材研究や授業づくりの時間を確保したいという教育現場の思いがあります。

これまで、各特別支援学校では上記の課題を克服しようと独自の工夫に取り組まれてきた経緯があります。そのような先行研究を踏まえ、まず個別の支援計画に関する教育情報を取り扱う校務支援システムが、平成 22 年度の IT 教育班 1 年長期研修員の成果物として作成されました。この支援システムは、県教育委員会指定研究の最終報告を受けながら、鏡が丘特別支援学校にて平成 24 年度より実際の運用が開始され、同時に指導計画や通知表の作成機能も追加されました。

平成 27 年度特別支援学校校務支援システム体制整備検討委員会は各学校の現状調査を行い、その結果を県教育庁に報告しました。平成 28 年度特別支援学校校務支援システム整備検討委員会実務者会議は、平成 29 年度の事業化を目指して具体的な仕様の検討を行いました。平成 29 年度は、業者に開発を委託し、鏡が丘特別支援学校のシステムに高等学校の進路相談支援システムの基本機能を加え、教育の質を高めるための教育支援機能を持つ校務支援システムの設計と構築を開始し、年度内の完成と試用を目指しています。また、本年度特別支援学校校務支援システム整備事業担当者連絡会は検証校として 4 校を指定し、平成 30 年度の全県一斉運用の準備をすすめています。



小学校プログラミング教育導入に向けて！

2020 年は、『東京オリンピック』開催の年であると同時に、小学校で次期学習指導要領が実施される年です。そのキーワードは「主体的・対話的で深い学び(アクティブラーニング)」、「プログラミング教育」、「英語の教科化」、「特別の教科 道徳」、「資質・能力の育成」、「カリキュラムマネジメント」等があります。その中でも今回は、小学校で初めて導入されるプログラミング教育について紹介します。

文部科学省によると、プログラミング教育とは「子供たちに、コンピュータに意図した処理を行うように指示することができるということを体験させながら、将来どのような職業に就くとしても、時代を超えて普遍的に求められる力としての『プログラミング的思考』などを育成するもの」とされています。さらに補足として、「コーディングを覚えることが目的ではない」とも説明を加えています。以上のことを踏まえ、IT 教育センターでは児童向けに実施していたプログラミングソフトやロボットを使ったセミナーを教師向けにも拡大しました。児童に『プログラミング的思考』を育成するための「児童セミナー(プログラミング体験)」を、教師にはどのようにプログラミング教育を教育活動に取り入れていくかをイメージしてもらう「プログラミング教育講座」を開講し、3年後に迫る新学習指導要領実施に備えています。ぜひ、今後開催される同講座へ多くの皆様が参加していただくことをお待ちしております。なお、6 月に開講した教師向けプログラミング教育講座受講者の感想の一部を以下に紹介します。皆さんは「あと 3 年後?」「もう 3 年後?」どちらでとらえますか。

○プログラミングということで身構えていましたが、分かりやすい説明で操作することができました。もう少し、授業につながる活用方法があれば教えていただきたいと思います。

○プログラミング教育に対して全くイメージできなかったが、今日の講座を受けて少しイメージがわいてきた。各教科を通して行うのは大変と思うが、これからも研修等を受けて学んで行きたい。



平成29年度中学生向けキャリア教育実践講座 —ものづくり体験隊員！作ってみようよ・触ってみようよ—

産業教育班では7/15（土）に初の試みとして「中学生」を対象に、農業・商業・工業の各分野においての専門高校における特色ある学習内容の紹介と本産業技術教育センター内の先端機器を活用した実習体験を「キャリア教育実践講座」と題して6つの「体験隊」に分かれて開催しました。

少子高齢化が加速する中、あらゆる業種において人材不足が社会的な問題となり、これから益々大きな課題になることが懸念されます。子供たちにとって小学校から中学校、高校、専門学校や短大、大学等へと多種多様な進路選択がある中、自分の個性を理解し、将来設計（キャリアビジョン、ライフビジョン）を立てながら「何を学んで」「何ができるようになりたいか」「どういう大人になりたいか」を考えさせる教育が必要です。また、本人任せや学校任せではなく、家庭や地域と一緒に頑張って大切な子供たちを育てていくことが必要ではないでしょうか？

これまで産業技術教育センターにおいては先端機器を導入し、主に各専門高校を対象に生徒実習や職員研修を行ってきましたが、加えて小学生や中学生に対して産業教育の視点からキャリア教育による「生きる力」を育成することができないか？という視点から新たな事業を行いました。

今回、中学校への直接訪問やホームページ、新聞広告掲載を通じて募集したところ、10校、17名の中学生、7名の保護者や引率者が応募、参加しました。非常に大好評にて成功裏に実施することができました。来年度もより充実した企画で皆様の参加をお待ちしております。



ウォータージェット加工機実習体験



コンビニ経営シミュレーション体験実習



ヨーグルトを使った飲料づくり体験



植物工場（水耕栽培）体験



ロボット Car (ビュートレーサー) 体験



産業教育説明会（農業・工業・商業）

※本総合教育センターに隣接する県総合運動公園での小学校の遠足を度々お見かけします。その際に、キャリア教育の一環として「産業技術教育センター」の施設見学等はいかがでしょうか。時間や内容についてはご相談に応じます。産業技術教育センターまでご連絡下さい。（Tel 098-933-7527）

平成 29 年度 前期・離島長期研修研究報告会

平成 29 年度前期・離島長期研修研究報告会が 9 月 13 日(水)～15 日(金)の 3 日間の日程で、本センターで開催されました。今回は前期長期研修員 28 名、離島長期研修員 5 名の計 33 名が各自のテーマに基づき、教育課題解決に向けた実践的な報告が成されました。会場には教育委員や関係学校長、多くの先生方のご臨席の下、6 ヶ月の研究成果を十分に報告することができました。今回の研究をさらに発展させ、今後の教育実践に活かせるものと期待します。

研修を終えて



教科研研修班
県立美里工業高等学校
教 諭 翁 長 園子

本県の教育課題に立ち向かおうと、意気揚々と教育センターの門を叩いた日から早、半年。研修は、予想以上に厳しいものでした。己の見識の甘さや未熟さに直面し、涙する日もありました。しかし、主事の厳しい指導に、沖縄の子供達の変容を願う強い使命感と、私達研修員の成長を願う温かい師の想いを感じておりました。だからこそ、研修員全員、研修を有意義なものにすることができたのです。最後まで丁寧にご指導して下さい、感謝申し上げます。研修で、真剣に己と子供に向き合う中で、師と仲間を得ました。今後、日々の教育実践で困難に直面しても、師と仲間が心の拠り所になるでしょう。



理科研研修班
沖縄市立高原小学校
教 諭 服 部 章 吾

半年間の研修を通して、考える「視点」を与えることの大切さを学びました。何気なく生えている植物にも、生きるための様々な工夫があります。その工夫に視点をあて、教材として授業に活かすことで、子ども達の主体性や対話を生み出すことができました。子ども達の楽しそうに学ぶ姿を見て、改めて授業改善の必要性を感じています。また、1つの授業についてこんなにも深く考え準備し、分析したことはありませんでした。じっくりと授業づくりに手をかけることができるこの半年間は、私にとって幸せな時間でした。本所で校種を超えた仲間たちと学んだ日々は、私にとって貴重な財産となりました。現場に戻り、子ども達のために更に尽力することで、研修を支えてくださった皆様への感謝の気持ちに変えたいと思います。



IT 教育班
県立鏡が丘特別支援学校
教 諭 横 山 俊 治

4 月、期待と不安を胸に初任者研修以来の本格的な研修を受けるべく、教育センターの門をくぐった。宮里所長の激励の挨拶に感動を覚え、各班の班長、主任、担当主事からの暖かい激励に、身が引き締まる思いと、これからの研修の不安も和らいだ。各個人の研究はそれぞれ違えど、全員が「児童生徒のため！」という想いを胸に秘め、担当主事のアドバイスや、仲間に相談しながら、どうにか最後まで研修に取り組むことができた。学校現場とは違った、貴重な半年の研究成果はこれで終わりではない。これからの研究成果の実践と子供達への還元が重要な課題であり、本当の意味での研修のゴールであると思う。この研修で繋がったネットワークを活かし、課題解決に向けて頑張ります。半年間ありがとうございました。



特別支援教育班 発達障害教育
那覇市立寄宮中学校
教 諭 儀 間 明 子

これまで専門的に学ぶ機会の少なかった特別支援教育の研鑽を積みたいと考えていた私にとって、研究・研修に存分に取り組んだ大変充実した時間でした。特に調査研究については丁寧にご指導いただき、データ分析の視点や研究報告の書き方、効果的なプレゼンテーション等について学ぶことができました。また、多くの講座からも教育における幅広い視点を学び、なかでも少年鑑別所の施設見学は貴重な経験となりました。審判を待つ青少年のなかには発達障害等のある子もいることを知り、近年新聞等で大きく取り上げられている子供の貧困と青少年の非行行動との関連についても深く考える機会となりました。今後は、今回学んだ多くのことを糧として学校現場に広く還元していきたいと思います。

最後に、所長をはじめ、特別支援教育班の皆様や所属校の学校長、調査を受けていただいた各学校職員、すべての皆さまに感謝申し上げます。